



長井紬の魅力に迫る！

～山大生による研究報告～



古から伝わる秘伝書を基に復刻した「長井紬」

絹が放つ光沢と伝統の「**緋**」の文様が美しい「長井紬」。長井市の伝統産業と称される「長井紬」は、米沢や白鷹にも伝わる「**置賜紬**」の1つであり、国の伝統的工芸品に指定されています。この度、長井市と山形大学人文社会科学部そしてコミュニティセンターが連携し、「長井紬」の魅力と可能性」をテーマに調査研究を実施しました。「致芳の人に「致芳の宝」を知っていただきたい」そんな思いでまとめました。ぜひご覧ください。

長井紬を含む「置賜紬」の起源

今から約400年前の江戸時代初頭、米沢藩主上杉景勝と家臣の直江兼統は、織物の原料となる青芋の栽培を領内に奨励し、主に越後方面に出荷する原料生産地として発展させました。

江戸時代後期には、米沢藩第9代藩主上杉鷹山が藩政改革に取り組み、産業奨励の環として自給自足による織物産地を目指しました。麻織物を作るために、越後から職人を招き、織りの技法を研究したり藩士の子女に技術を学ばせたりしましたが、凶作によって青芋織を中断しました。その後は、領内に桑を植え、養蚕を奨励し、絹織物の製造に転換しました。その当時の面影として残っているのが、西五十川の「大桑の木」です。また、その頃、成田には養蚕の名手として名を馳せた善四郎という人がいました。鷹山は、善四郎を城内に呼び、養蚕の指南をさせました。その功績が認められ、善四郎は名字帯刀を許され、鈴木姓を名乗ったと言われています。

「緋」を追求した致芳の先人たち

絹織物への転換に伴い、米沢藩は織物の先進地である京都から職人を招いて研究開発に取り組みました。中でも、実際に布地として織る前に、紅花や藍、紫紺などの植物染料を用いて糸を染める「先染め」の技法を確立しました。また、江戸時代中期から明治に至るまで、置賜紬の最大の特徴とも言える「**緋**」の技術を習得するために技術開発が積極的に行われました。「**緋**」とは、前もって染め分けた糸を経糸、緯糸、またはその両方に使用し、独特の文様を織り成す技法の1つです。

文化年間（1800年頃）には、東五十川の牛澤十助が旅人より「**緋**」の技を伝授されたと伝わっています。更に、文政年間（1820年代）には、白兔の高橋仁右衛門が紬織の先進地であった結城（現茨城県結城市、長井市の姉妹都市）より経糸、緯糸両方に**緋**が入った「**経緯併用緋**」の技法を習得したり、成田の飯澤半右衛門は、染色から織の改良のために自ら赴いたと言われています。

明治19年には、竹田清五郎、井上新兵衛、斎藤新吉らの尽力により、新潟県の十日町から西方吉太郎を招き、東五十川の多くの住民が指導を受けたと伝わっています。現在、東五十川の山崎公園には、西方氏を称える酬恩碑が建立されています。その西方氏の指導が功を奏し、長井紬の「**緋**」の文様は「米琉緋」とも呼ばれ、明治後期から昭和初頭にかけて全国に知れ渡り一世を風靡しました。

「長井紬」にまつわる致芳の史跡



上杉鷹山が奨励した桑の苗木の1つ



西方の功績を讃える酬恩碑

渡源織物（成田）

渡源織物の創業は、昭和21年。現在2代目を継ぐ徹さんの父である源三さんが燃糸業から始め、現在の東京都武蔵村山市周辺で織られていた「村山大島紬」の**緋**織用の半自動の織機を導入し、「長井紬」の生産を開始しました。

現在の従業員は、徹さんご夫妻と双子のご子息の家族4人に加え、8人の女性従業員が働いています。工場には織機が8台あり、その他に米沢と福島にも工場を構え、月に300反程生産しています。生産品の大半は、着物と帯に加工されます。

主な流通は、米沢の買継商を経由し、京都や東京の小売店で販売される形式です。商品開発は基本的に小売店等の要望や市場の流行などを参考に買継商と徹さんが協議しデザイン等を決めています。渡源織物の出し値は、1反あたり5〜7万円であり、上代価格は5〜10倍になります。

材料となる絹糸は中国産が主であり、現在、国産の絹糸は高価で使われていません。また市内には、糸を染める染屋や糸を燃る燃糸屋が無くなり、いずれも米沢の業者に発注しています。「長井紬」の特徴である「**緋**」の染めは、自社でも行っています。竹べらを使い、「**緋**」になる部分に染料を摺り込む「摺込緋」や、「**緋**」になる部分を木綿糸で縛り、染料が染み込まないようにしてから地の部分を染める「括り緋」の技法を用いています。

渡源織物では、比較的多くの反物を織ることから、製品以外の「端切れ」も生じます。その「端切れ」を活用した商品展開も期待できます。